高齢社会をよくする女性の会会報

No.115　1999年10月発行

高齢社会をよくする女性の会
東京都新宿区新宿２－９－１
第31宮庭マンション802号室
ＴＥＬ.03－3356－3564
ＦＡＸ.03－3355－6427
郵便振替　00100-0-79477

―目　次―

第18回高齢社会をよくする女性の会全国大会 … 1

９月例会……12

リレー・エッセイ㊼横路由美子……14

男・老いを語る㉟横山宗男……15

本の自己紹介、事務局だより……16

第18回高齢社会をよくする女性の会全国大会in島根

「高齢化日本一の島根から発信」

――老いへの歩み十人十色　60億人60億とおりの生き方をめざして――

ことし、一九九九年は国際高齢者年。その記念すべき年九月十一～十二日に高齢化日本一の島根県で開かれた全国大会には、約一六〇〇人が参加しました。三年前から準備を始めた実行委員は、二〇代から七〇代まで総計二六六人となり、東西に長い県内の各市町村及び鳥取県からも参加。映画上映会、講演会をもって市民に呼びかけ、ビデオ制作にも取り組み（四本）、高齢化、過疎化の深刻な実態を女性の目で捉える活動をしてきました。また、分科会を構成するにあたっては、高齢者のための国連五原則―自立・参加・ケア・自己実現・尊厳―にあわせ、多彩な分科会を用意し、老若男女がこの全国大会を支えてきました。今、まさに介護保険前夜。夜明けをめざして熱気あふれる大会となりました。（第18回全国大会実行委員会）

水の都松江で開催された全国大会のオープニングは、安来節家元四代目渡辺お糸さんの謡う安来節で始まった。「高齢社会をよくする女性の会全国大会～、聞いてお帰り安来節～」と家元が安来節を替え歌で謡うと、会場から笑いと拍手が。その後、一文銭を入れた筒で舞台を叩く郷土芸能「銭太鼓」と、どじょうすくいが披露された。

開会セレモニーでは、まず主催者を代表して樋口恵子さんがあいさつ。「国際高齢者年の今年、日本で最も美しい湖畔の町松江市で、是非全国大会を開きたいという申し入れが三年前にありました」と、

開会セレモニーで挨拶する澄田信義知事、宮岡寿雄市長とテルマ・オコン＝ソロルサノ所長

高齢化日本一の島根で、この全国大会を開催することになった経緯などを話した。

次に、山代朋子実行委員長が、「今日生まれた赤ちゃんも、高齢社会に生きています。男性をこの会にまきこむのが、実行委員の願いでした」と男女共同参画社会、三世代交流をアピール。大会のシンボルマークは、島根のS、シルバーのS、サポートのS、システムのSなどをつないだ形であることを説明した。

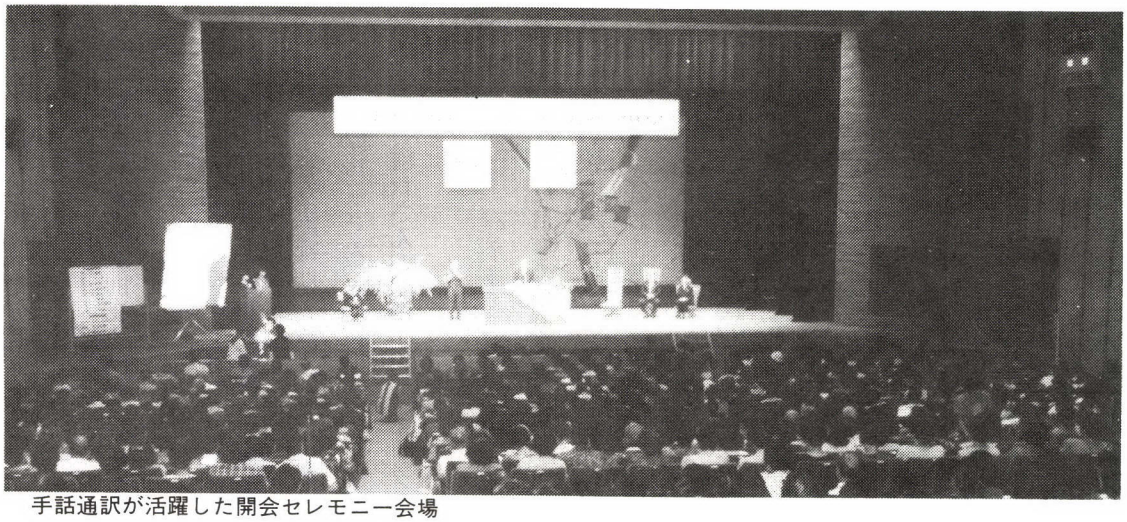
最後に、来賓として島根県知事と松江市長、国連広報センター所長のテルマ・オコン＝ソロルサノさんがあいさつ。オコンさんは、「日本のふるさと島根県で、国連の国際高齢者年に関する会議が開かれることは、とても有意義だと思います。色々な経験をした高齢者の役割は社会にとって大切です。国連は高齢者のための五原則、自立、参加、ケア、自己実現、尊厳を広く広める努力をしています。皆様が幸せで実りある老後を送られることをお祈りいたします」と日本語で話した。

続いて、国連NGO「ヨーロッパ高齢女性ネットワーク」国際担当、ロンドン・ルイシャム区政策・ネットワーク室長のエリザベス・スクレターさんによる記念講演が行われた。

「ヨーロッパ高齢女性ネットワーク」は、ヨーロッパの女性をつなぐEU助成プロジェクトが起こった一九九三年に結成された。現在は、EU諸国のほとんど、中央及び東ヨーロッパ諸国、イスラエルまでネットワークを広げているという。エリザベスさんの所属するロンドン・ルイシャム区ネットワークは、「ヨーロッパ高齢女性ネットワーク」のなかの地方グループに当たる。現在は、ヨーロッパだけでなく、ロシアなどでも地方高齢女性グループの活動があるそうだ。

エリザベスさんは、ヨーロッパにおける高齢女性の実態や、活動などを写真やグラフを使って発表。ヨーロッパでは、「高齢化の女性化」（女性の方が男性よりも長生きする）が起きていること、高齢女性の雇用率が極めて低いこと、ヨーロッパの一人暮らしの高齢者の現状などについて報告した。

また、高齢女性差別についても触れ、



手話通訳が活躍した開会セレモニー会場

高齢者が前向きな行動をとると、保護的な言い回し（例えば「おばあさんでも車レースに参加」など）で表現されると紹介。あるいは、魔女、醜い老女、など否定的な表現で表されることもある、と話した。

そして、これらの実情からあぶり出される問題点を指摘した。例えば、スカンジナビア諸国を除くEU諸国の年金システムは、ほとんど夫が働いていて妻は専業主婦、しかも夫の死後数年しか生きないだろうという家庭をモデルにして作成されている。高齢女性は非拠出年金の主な受給者になるが、昨今のように女性の寿命が長くなると、その年金システムが実情に合わず、高齢女性の貧困の危機を招いてしまいかねない。

また、長く生きる反面、寝たきりなど、生活の質を損なう状況に見舞われがちだ。あるいは、夫の死後一人暮らしを余儀なく強いられた場合、それが体の衰えや、社会との接触の欠如や貧困と結び付いた時、問題が起こりやすい。いわゆる社会的孤立に陥りやすくなる可能性が高いという。

こうして、ヨーロッパ女性プロジェクトは、高齢女性が一生を通じて累積的な不利益を被っているという認識のもとに、彼女たちの草の根の声を拾いあげ、現状を変えていくことを目的として開発された。高齢女性は、活動的で社会的に生きる権利を求めているはずだ。また、仮に体が弱っても、収入が少ないからとか適切な施設福祉サービスがないからといって、家族に介護の負担を強いることはしたくないのではないか。家族に介護してもらうか否かは、平等なスタンスで家族と相談したいにちがいないとエリザベスさんは言う。

この六年間、エリザベスさんたちが自らの活動を通じて学んだことは、「高齢者と高齢女性は同じでないこと」「地方レベルでの高齢女性を動かすことの重要性」「地方、国、国際レベルで活動を支援してくれる組織を持つことの重要性」などだという。

そして、最後に、「国や地域を越えて情報交換を行い、ネットワークを作って、

政府に高齢女性の声を届けるべきだ」と述べた。

最後に、「介護保険前夜」～明けない夜はない。夜明けは島根から～と題してシンポジウムが開かれた。パネラーは、山崎史郎厚生省老人福祉計画課長、池田省三龍谷大学社会学部助教授、ジャーナリストの藤原房子さん、山代朋子実行委員長の四氏。樋口さんが、コーディネーターを務めた。

まず最初に、パネラー全員が高齢社会をテーマにした自作の川柳を披露。「重介護やさしい嫁も鬼になる」（山代氏）、「コンピューター狂わす凄さまだらぼけ」（藤原氏）、「票めあて払うというのに負けてやる」（池田氏）。山崎氏が「介護保険厚生省が要支援」と詠むと思わず会場からは苦笑いが。樋口さんも「男なら介護に力と金を出せ」と一句披露した。

次に、山代委員長が島根県の高齢化について地図を使って説明。県西部の広島県との県境にあたる中山間地域では、高齢化率が四十パーセントを越える所も。ちなみに県平均は二十三・七パーセントで、全国を十五年も先取りしている。

また、介護保険に関する自治体へのアンケート結果報告もあった。回答が返ってくるのが非常に遅い自治体や、逆に迅速な自治体もあるなど、回答の仕方で介護保険に対する取り組みの具合が一目瞭然にわかったという。アンケートの内容は主に、「住民への情報公開について」「介護保険事業計画策定委員会について」の二点だ。特に、策定委員に女性が含まれているか否かは、注目すべき点。残念ながら、策定委員に女性が占める割合は、各市町村とも一様に低い。

その後「島根のまち・むらから」と題して、出雲市、広瀬町、玉湯町、匹見町、邑智町、隠岐の西ノ島町からの代表が、それぞれの町の実情をレポート。毛利元就に討たれた尼子氏の居城地・広瀬町では、積雪の多い地域への訪問介護が大変で介護保険導入に向けて人材不足が心配なことなどが報告された。また、玉造温泉をかかえる玉湯町の発表者は、温泉地であるため夜間の就労者が多く深夜の訪問介護の必要性があることなどを発表。地域別のきめ細かな柔軟性のあるケアが介護保険制度に求められていることがクローズアップされた。

また、県の中央部に位置し中山間地域のへき地をかかえる邑智町の代表は、介護サービスに地域格差の出る恐れがあると懸念。県西部の過疎の町として有名な匹見町は、高齢者が多く低所得層が多い。そのため、高い保険料金を払っていけるかどうか心配で「保険料高くサービスなし」というパターンのモデル町ではないかという意見も出た。本土から五十キロ離れた離島の西ノ島では、介護は嫁がするのが当たり前という考え方の変化を望まない心の壁（心のバリアフリー）が一番の問題。出雲市は、その壁を越えつつあり、策定委員の半数は女性だという。

その他、藤原さんと樋口さんは、家族介護の現金給付について触れ「介護は家で女性がするものという役割が固定される恐れがある」と問題視。また、池田氏は「介護保険は高齢者の自立が目的だが地方自治の自立も促す」と、島根県が生活圏域を九ブロックに分け、保険運営を

パネラーの池田省三さん、藤原房子さん、山崎史郎さん、山代朋子さん

広域化したことを評価した。自治体間のサービス格差に関しては「保険でカバーできない部分は福祉で補うべき」と指摘。

山崎氏は「島根県、高知県など高齢化率の高い県ほど介護保険に対する取り組みが進んでいる」と評価したものの「制度には限界があり今後は予防福祉や社会教育に力を入れる必要がある」と話した。

夜は、宍道湖に臨むホテルで、レセプションが開かれた。島根県内外からの参加者をはじめ、講演者やシンポジウムのパネリスト、島根県会議員や行政関係者など大勢が参加。壇上で、二日目の分科会紹介や、島根実行委員会の委員紹介などが行われた。その席で、山代委員長のご夫君が、地元の民謡「貝殻節」を披露。「委員長の代わりに炊事係をして下さったご夫君です」と司会が紹介すると、会場から拍手が沸き起こった。

その後、同ホテルで、女性議員と語る「女性を政治の場に」「フリートーク」「手作りビデオを観る」の内容でナイトフォーラムも開催。特に、手作りビデオの鑑賞は好評だったようだ。このビデオは、全国大会へのプレイベントとして制作し、既に県内では上映済みのもの。中山間地域に住む高齢者や、高齢化率が六十パーセントを越える地域に住む人々など島根県内に住む様々な高齢者の姿を追ったビデオだ。最後まで自分らしく生きたいと願う人、生涯現役であろうと創造工夫し努力する人など、ビデオに映し出された自立して生きようとする高齢者の姿は感動的だった。

なかでも、出雲神話「ヤマタノオロチ」のモデルではないかといわれている斐伊川沿いの町斐川町で自宅を開放し、託老所を開設した三代さんの取り組みは、多くの参加者の共感を呼んだようだ。三代さん自身が八十歳を越えるご高齢だが、託老所を開くのは、三代さんの以前からの夢だった。誰からの援助も受けず、皆が持ち寄る茶菓子でお茶を飲み、話をし、やって来る老人から茶菓子代程度の料金しか徴収しない。三代さんの年金も維持費の一部に当てられているのだが、ご本人は「夢のために使っているのだからいいのです」と言う。「この託老所のことを知っただけでも、島根に来たかいがありました」と言って帰って行く参加者もいた。

こうして、ナイトフォーラムを終え、一日目の日程をすべて終了した。

（田中量子・記）

〈尊厳〉

最期まで、私らしく生きる

沖藤　典子／金森トシエ／中村　雪江
山根　洋右／寺本　恵子／山内　雅弥

中山間地が多い島根県から発信されたビデオフォーラムに共感の声がもれる。

（寺本恵子さん）高齢化率三二％の石見町の山村で共に生きるために、まちづくりを実践。女性たちの生き方に周囲を巻き込み地域でありのままに生きる。ひとりで暮らすために、心のサポート・手のサポートをと訴える。

（沖藤典子さん）老いを迎える前に考えたいこと。若いときからの人生設計。我が家で最期まで暮らしたい。最期私はどうしたいか。大都会は情報過疎だ。老いていくとき情報が大事。尊厳を守るための仕組みをと力説。

「女性たち負けるなよくする会があり」

（金森トシエさん）公的サービスは権利である。大いに使うこと。そしていい生き方を。私らしく生きるために「四律トータル人生」を提案。笑いを見つけて笑う毎日。孤独に強くなる。人を持つ、友達を持つ。前向きに生きる。と。

（中村雪江さん）家庭での介護地獄から虐待が起こる。高齢者が相談する場が必要。人権が大切にされること・サポート制度の充実を。高齢期を豊かに生きるために心の羅針盤を持つこと。孤立を避け、好奇心を持つことも大事。福祉サービスを受けて最期を。

（山根洋右さん）大学の倫理として、人間尊厳を守るスタッフを育てることだ。二一世紀への提言として自分が住みたいまちづくり《市民が主人公》。都市と農村の融合《連帯》。行政と住民の《協働》で政策づくりを、と説く。

討論ではパネラーに質問が殺到。返答ラッシュ。会場の発言も活発に行われ、参加者から生きた歴史が語られる。日本中どこに住んでいても、最期まで私らしく生きたいとの思いは、参加者一人ひとりに共感を呼んだ。「自分も変わり相手も変わる。情報・ネットワークをキーワードに二一世紀を」と司会の山内雅弥さんの言葉で第一分科会は締めくくられた。

（坂本和子・記）

〈自立〉

団塊の世代のライフプラン

木村　民子／筒井　圭子／弥重　節子
松本　　正／横田　綏子

団塊の世代（S22～24生）の真ん中生れの**木村民子さん**が、団塊世代が辿った歴史を振り返りながら、年代ごとに社会に与えてきた影響や団塊世代の特徴等について話した後、「人生八〇年時代になると子育て後が三〇年間になる。この期間を夫とどう向き合って過ごすのか、夫婦で話し合ってほしい」「女性の社会参加や政治参加を増やし、暮らしやすい高齢社会づくりを」と提言された。

筒井圭子さんは「二〇二〇年には高齢化率が二五・五％、有権者に占める高齢者比率が三割を超える」との説を紹介し、「連帯ができれば高齢者にやさしい社会を作っていける」と投票すれば変わる力、変える力も持つ団塊の世代の社会的発言力について指摘された。

松本正さんは「七〇歳、八〇歳になっても自分で収入を得てまちに出る。たとえ車椅子生活になってもまちに出て、消

費もでき仕事もできる環境を作ろう」と趣味や社会参加だけでなく、生涯現役ですごせる仕組みづくりが今から必要と発言された。

そして、十人十色のライフプランを実現するための共通項として、年金・働き方・ジョブシェアリングの問題・バリアフリーのまちづくり・各人の考え方や意識などについて話し合われ、参加者からも男女の役割分担やまちづくり、健康問題等活発な意見がたくさん出された。

最後に、われわれはこれから高齢新人類として、共通項の解決のために、身近なところからネットワークづくりをはじめようではないか、ということで終わった。

（澤　アツ子・記）

〈自己実現〉私の人生をデザインする

林　慶子／松村満美子／吉武　輝子
五條由加利／尾崎　薫

（吉武輝子さん）人生いつもスタートライン。この四月九四歳で逝かれた三岸節子さんの伝記の脱稿を終えたばかり。彼女がハードルを越えて新しい境地を開いた生きることの姿勢を、熱いメッセージとして伝える。長い人生には、やり直しはできないが、仕切り直しはできる。人生の風景を変えないと生きていけない。チャンスが与えられたときには勇気を出してそれをつかむ。それが時代を変える。

（テルマ・オコン＝ソロルサノさん）一九歳から経済的に自立。五四歳のとき男児を養子にし、母として生きる喜びを得、人生を豊かに生きる。

（五條由加利さん）大阪から隠岐へIターン。理由はリフレッシュ。子育ては都会と田舎とどちらがいいかと思っていたところだったので。隠岐へ移っていい人生がデザインできたと思っている。

（松村満美子さん）ＮＨＫアナウンサー

をスタートに人生のエポックで職業生活を変えながら還暦を迎える。仕事は継続の方がよいが、仕事を一つ一つストップする事により新しいことに挑戦。現在は子育てを経験した人達と一緒に子育てサポートの体制づくりを考えている。老若男女生き生きと自分らしく生き通せる世の中に早くしなければと思っている。

（林　慶子さん）今は古稀。一五歳の頃は学徒動員で底のないブラックホールに落ちていく感じだった。女だけに負わされた介護の状況にいる人は、こういう思いを持っているに違いない。誰が悪いのではなく、女性自身の行動で意識を変えていくことが大切。育児のため仕事を辞め、また働こうとしても難しい。やっとやりがいのある仕事をというとき老親の世話が。そういう状況の中で介護されたくない有名無名の女の呼びかけで、一九八一年女の自立を呼びかけた。それが今回第一八回。司会の尾崎薫さんを含め三〇代から七〇代各世代の助言者の発言で、女性の人生を長いスパンで考えるユニークな分科会となった。

（落合熙美・記）

〈ケア〉

介護保険制度と家族

谷嶋　陽子／望月　幸代／石毛　鍈子
春日キスヨ／渡部　英二／速水　雄一
田村　節美

介護保険は多くの問題と不安を抱えながらも来年四月からスタートする。問題点ばかりをクローズアップしている時期ではなく、私たち市民がいかに主体的に参画し、行政や事業者との協働作業によって「介護の社会化」をめざす制度の基本理念を実現していくのか、そのために今後何をしなければならないかの方向性を、参加者それぞれの立場で見出すということに議論の焦点を絞った。

四六〇余名の参加者を得て、会場でのインタビューと、初日のシンポジウムに対する出演者の感想から始まった。

広域連合で取り組むことで効果を上げようとする加茂町と独自展開に主力を置く出雲市の実例を含め、①家族給付②基盤整備③介護労働④情報公開と住民参加という四つの柱にそって進められた。

家族給付については、現実にはこれを望む声もあるが、現金給付を許しては制度の理念がゆがめられるばかりではなく、サービスの基盤整備を遅らせる。家族は「介護しなければならない」という気持と、実際は「耐えられない」という気持のギャップが大きく、家族の介護を求めるのは男性に強く、そこにジェンダーの視点が重要である。

介護保険は他の制度と違って、住民が参画できる。プライバシーの保護を徹底しつつ、あらゆる面で情報開示を求めて声を上げていくことが大切である。

低所得者の負担も大変だが、保険料は介護報酬との関係があり、安ければいいということではない。制度の趣旨と現実を踏まえた議論が必要ではないか。

介護保険は弱いものにとって厳しい、まだまだ制度の中身も知られていない、どうしたらいいのか処方箋としての情報が必要、などの意見が数多く出された。

最後に、積極的に住民参画を実現し、よりよい制度としていくためにエンパワーメントしていこうと締めくくった。

（田村節美・記）

〈参加〉

痴呆になっても、……

渥美　雅子／高見澤たか子／白井千賀子
槻谷　和夫／石橋　典子

まずはじめに「痴呆を人間の自然の姿として受け入れるには」「地域で支える仕組みづくりは」「成年後見制度」等について各パネラーから提言が示された。

（高見澤たか子さん）痴呆になっても人間らしく生きるには、その社会にどれだけの人権意識が育っているのかが最終的に問われる。そして素顔で暮らせる社会にするために、適切な介護と家族への支援等、現在痴呆のお年寄りと暮らしている人を例にミニ講義。

（槻谷和夫さん）「すべての国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」この実現のために住民が望むサービスを中心に考え、実践していくと具体的で力強い提言があった。

（白井千賀子さん）長年ケースワーカーとして働く傍ら高齢者虐待や痴呆症の人の生活問題、人権擁護に携わる。困った時はすぐに相談することが大切。それに

よって地域で守ることができるのではないか、そのために環境を整備し、最期まで尊厳を持って暮らせる社会保障システムづくりと、気兼ねなく人生を全うすることのできる社会をめざそうと結んだ。

（渥美雅子さん） 最近の法廷での実例を示し、遺産の贈与で痴呆症の親を悪用する娘や息子たちの実態をリアルに語られ、成年後見制度の重要性を痛感した。

フロアとの意見交換では、痴呆症の老親との生活体験や思いなどが語られ、それについて各パネラーから助言があり、活発なやり取りがあった。

司会の**石橋典子さん**が分科会冒頭で「痴呆老人のつぶやき」というスライドを紹介。その中での元教師ワタナベケンスケさんを思い浮かべる。

『とどまることなく生きていく。いつの頃からか物忘れが始まった。手紙もすぐには書けなくなった。ケンよ、しっかりせい、と自分に言い聞かせる。ボケても悠々たるボケ人生を歩んで生きていきたい』と。

（杉谷君子・記）

〈参加〉まちに出る、まちで暮らす

袖井　孝子／井上由美子／林　玉子
大原　秋年／君島　昌志

分科会のはじめに県立松江南高校ＪＲＣの生徒達がトイレマップを作成する中で気づいた点をスライドを用いて発表。特に身障者用トイレには性別がなく「人権問題」では、とまず指摘した。

これに対し助言者の**井上由美子さん**はトイレの例に見るように障害者に対しては性別すら意識されない状況があることを指摘。ジェンダーに関わる問題として捉えるべきだとした。公民権運動から生まれたＡＤＡ法下の米国のアクセスビリティという概念を学ぶべきだとし、例えば米国の大学ではトイレや教室などの施設へのアクセスは勿論だが、学問そのものへのアクセスを保障するものだと説明、この点福祉領域のこととする日本とのギャップに疑問を呈した。

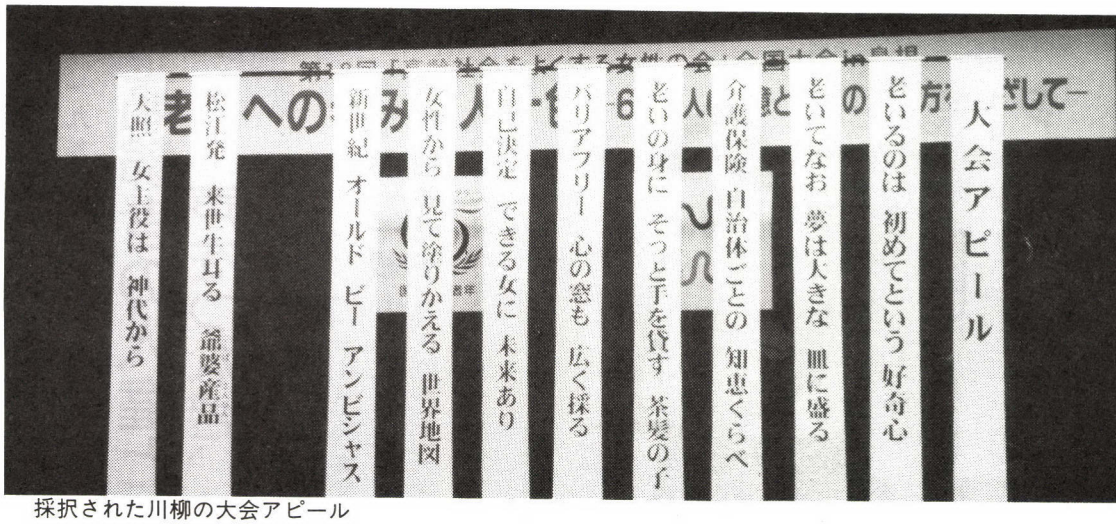
林玉子さんは建築家の立場から排泄は人間の尊厳に関わる問題だが、日本では家相にみるように不当に軽んじられてきた。文化的に常識視されたそのものを疑い、その打破こそがバリアフリーなのではないかと助言した。

大原秋年さんは演劇活動を通じろうあ者との交流から、手話がわかるろうあ者は一部だと気づいたことを例に挙げ、健常者の障害者理解は一面的すぎると指摘。その思い込みを立場を超えて自覚する試みがバリアフリーの第一歩と提言した。

袖井孝子さんは健常者と障害者の区分そのものがおかしいと指摘。そうした個々人の中にある意識そのものがバリアであり、その克服こそが必要だとした。そのためにはオープンに論議していくことが大切で、バリアフリーとは新たなコミュニティを形成することであり、住みよい自分達のまちを創造する過程ではないかと締めくくった。

（田中純一・記）

〈ケア〉分科会・分科会・分科会・



採択された川柳の大会アピール

その後、分科会報告と、参加者の意見発表があり、「家族介護のことが話題になっていたが、争点となっているのは家族介護ではなく女性介護なのではないか」などという意見が会場から出された。最後に「手のひらを太陽に」の替え歌を、全員で合唱。「自己決定できる女に未来あり」などの大会アピールを採択し、次期開催地の長野県を紹介して閉会した。

閉会あいさつで樋口さんは、家族介護の現金給付問題に触れ、「家族への現金給付は、介護を社会で支えようという介護保険制度の趣旨に反し、結局、嫁だけに介護を押し付ける結果を招きかねない」と批判。「金に目がくらまぬ女が世を変える」と川柳を詠んで皮肉り、「介護をしない男性を人間とは呼ばない」と締めくくった。また、「大会の受付を担当したのは中学生です」とも。分科会の発表者のなかには、島根県立松江南高校の生徒さんもいた。

各世代を構成する人のすべてが共生して参加したこの大会の意義は、大きい。

（三十代の実行委員、川島典子・記）

次期開催地長野の皆さんへバトンタッチされた“熱い心”

◆九月例会◆

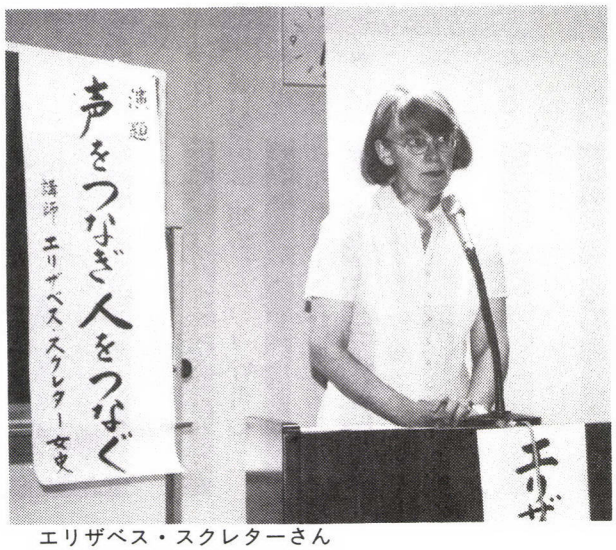
一九九九年九月十六日㈭――於・虎ノ門国立教育会館

高齢者の人権と国際ネットワーク
――声をつなぎ、人をつなぐ――

講師・**エリザベス・スクレター女史**
（ロンドンルイシャム区政策平等室長、国連NGO「ヨーロッパ高齢女性ネットワーク」国際担当）

通訳・**林　千根**

司会・**袖井孝子**（お茶の水女子大学教授・当会理事）



エリザベス・スクレターさん

ブリティッシュカウンシルから派遣され来日していた国連NGO「ヨーロッパ高齢女性ネットワーク」国際担当、ロンドン・ルイシャム区政策・ネットワーク室長のエリザベス・スクレターさんが、九月十一・十二日に島根で開催された全国大会と十四日は大阪、十六日には東京で行われた学習会で講演をされた。

東京の学習会では、「高齢者の人権と国際ネットワーク」――声をつなぎ、人をつなぐ――というテーマで話された。司会者袖井さんの強い要望で、エリザベスさんがイギリスで実際活動している具体的な内容について詳しく話をされた。

当日は、あいにくの雨模様と全国大会が終わって間もないということもあり、集まった人数は多くなかったが、参加者のみんなは熱心に聞き入っていた。医療現場での高齢者の人権は守られているか、年金は十分にもらえているか、いくらぐらいか、ボランティアは無償と有償があるのか、グループホームの取組みなどについてたくさんの質問が出され、エリザベスさんが答えるのに苦慮する場面もあった。

労働党が政権をとった時、イギリス政府は高齢者にとっていい政府をつくろう、そして縦割り行政ではなく横のつながりを強くしていこうということを綱領に入れ明確に位置づけた。それを実現するために、「ジョインアップ」をキーワードとして政策を進めた。

ジョインアップの具体的政策

●地方自治体、専門家、高齢者、高齢者グループがチームを構成しさまざまな高齢者の問題を調査する。

少数である黒人グループなどの問題についてもきちんと耳を傾け、政策につなげるようにする。

●政府と地方自治体はどのようにネットをつなごうとしているのか。

「平等係」という新しいセクションを自治体に設置した。そこでは区や高齢者向けのサービスが高齢者のニーズに合っているものかどうかを適切に審査を行う。また、高齢者がサービスを利用できるよう情報が十分届くようにする。

エリザベス・スクレターさんと通訳の林 千根さん

●年金生活者委員会を作り、そこで、高齢者と政治家が話し合える場を設ける。など、具体的な問題を政策に結びつける努力をしているが、政府は財政問題を理由にいつもとりあってくれないのが現実である。

そこで、同じような問題を抱えている草の根団体がヨーロッパ各地にもたくさんあることを知った。それをインターネットでつなぎ、大きな声として問題を上げていくことや問題だけに限らず生きがい、趣味をとおして世界の女性が連帯をしていくことが大切だということに気がついた。それが、女性の説得力となり、政策決定にも影響を与えていくものだと確信している。

北京の女性会議――高齢者のためのミーティング――は、世界の高齢者の女性をつなぐスタートとなった。

アイルランドの女性団体から、高齢者が望んでいるのは生活の安定だけでなく平和であるというメッセージが、いまやインターネットをとおして世界の平和を望む女性団体をつないでいる。

自分たちの小さな草の根団体を世界につなぎ、大きな声となって強くなっていこうというエリザベスさんのメッセージは力強く頼もしく思えた。（本間郁子・記）

エリザベス・スクレターさんのホームページ
http：//www.bettergovernmentforolderpeople.gov.UK
www.trasinet.com/own

リレー・エッセイ ㊼

自立した個の連帯を求めて

横路 由美子（よこみち ゆみこ）

私の実家は九州福岡である。九〇歳の母は、週二回の訪問看護を受けながら、二階に住む姉夫婦のサポートで半自立生活をしている。二年前父が亡くなり急に老い込んでしまった。この夏、私がお盆に帰れなかったら、夢でもみたのか「由美子が札幌から飛行機で来る」といって夜半まで待っていたという。

私はというと、単身赴任状態の国会議員を夫に持ち、姑と札幌でお互の自分らしさを大切に共働・共同生活を実践中である。八三歳になる彼女は、日中友好協会の仕事など多忙で元気。春先ツルツル道路で転び右手首を骨折して二、三日落ち込んだが持ち前の負けん気で立ち直ってくれてホッとした。私たちの〝実践〟はこれからが本番と覚悟している。

私の三人の子ども達は皆、あちこち巣立ってしまったが、オーストラリアで働く娘曰く「お母さんの最後の一ヵ月は休みをとって看てあげる。それまでは自立していてね」――最後の一ヵ月がいつなのか、痴呆症になるか誰にもわからないのが問題だ。

五、六〇代の私の世代は、親をつき離すことはできず、ともかく介護の社会化をどこまで実行するか、日々実践の中にいる。情報不足、夫や兄弟達の無理解に疲れてしまった友もいる。そして自分自身の老後となると、老いの一歩手前でなく十歩も手前から準備し処し方を自ら決めていかなければならないと思っている世代である。

六五歳を機に〝物〟を処分しケア付マンションに移った友、夫を亡くした友人どおし同じ軽費老人ホームに入った人達もいる。様々な生き方、それぞれの選択。血の繋りや国境を越えた家族、家族を超えた連帯――そんな市民社会の到来を夢みている。それにしても、例えば大銀行に何兆円もの税金をそそぐのなら、どうしてプールのある立派なホテルなどバブルの後遺症を廃虚（資源の無駄）にするのだろう。ケア付住宅にならないものか――行政にも市民運動にも柔らかく優しく大胆な発想が求められていると思う。

プロフィール
一九四二年生。一万人市民委員会札幌の呼びかけ人代表。第一五回全国大会副実行委員長。種々の市民活動のネットワークに従事。

（次回は交渉中です。）

21世紀は人々との調和の時代

横山宗男（よこやまむねお）
（大井川町町長）

昭和6年生まれ、中央大学法学部卒。平成4年より静岡県大井川町町長。地方自治の本旨に基づいたまちづくりを提唱。行政側代表として県社会教育委員、男女が創るしずおか推進懇話会委員を務める。

私は昭和六年生まれと先ず申し上げます。私の町には航空自衛隊第11教育団が所在し、戦時中は彗星（すいせい）、零戦基地で、強制疎開者が僅か二カ年で急造した基地があります。進入路の直下に昔から住んでおり、騒音どころか、戦時中は日の丸を振って帰らぬ若者を見送った一人です。

予想だにしなかった〝もったいない〟という言葉が通じない今の生活では、もはやこの便利さ豊かさを捨て去ることは不可能です。品々は家庭から道路に出せばゴミとして扱われ、その多くは自然を破壊し環境悪化を生みます。また、化石燃料とともに石油文明は曲がり角に来ているのでは?とも思え、広い意味での科学技術を肯定しながらもリサイクル文明に切り替えざるを得ないと思います。

豊かさを求めて発展してきた近代社会の中で、大企業が経済的効率を優先するあまり、多くの人がものの道理を忘れてしまったのではないでしょうか。仏教で言う縁起の道理を忘れているのではないでしょうか。

宇宙のエネルギーはすべて原子力であると言われています。人間のみならず、動物も植物も自然の原子力によって共存し、調和が図られています。私たちのまわりを見渡してみても、あらゆる存在が関係しあいながら成り立っており、究極の因縁、関り合いを認識するとともに、自然の生態圏と共に生き、生かされることを自覚しなければなりません。二一世紀は人々との調和の時代となり、それに一生懸命になることではないでしょうか。

常に創造と破壊を繰り返しながら向上している現世を、「自分が何かを出来る」と思えるのは最高に楽しいことです。どんな小さなことでも、実際に何かを成し遂げることは更に楽しいことであります。科学者に頼るのみではなく、各家庭で一人ひとりが物を大切にし、迷惑をかけない意識は大きな力となり、沢山の人が良い雰囲気を漂わせると地球は明るく楽しい調和の楽園になります。

本の自己紹介

「人生案内」うちあけばなし

金森トシエ著

（ネスコ発行／文藝春秋発売　一五〇〇円＋税）

＊60年代から90年代にかけての読売新聞生活面の「人生案内」の相談・回答から五十例を選び、結婚、夫婦、共働き、子育て、性生活、嫁姑、老後など九章に分けて、後日物語も含めて紹介。

＊投書の流れに見る社会と結婚や夫婦の変化、少子高齢化、家庭内暴力、買春、カップル文化の未熟さなどへの私見。

＊私自身の、専業主婦から新聞記者に転身した事情や、夫婦げんかも含めた暮らしの〝うちあけばなし〟。

私は、長い記者生活の間約二十年間仕事のひとつに「人生案内」欄を担当、その経験をもとに右の三つを柱にまとめました。今も介護役割の重さにあえぐ嫁と、一方フィリピン花嫁に戸惑う姑など、変・不変が交錯する女性史の一面もうかがえます。老後の章のタイトルは「ふたりでも寂しい、ひとりでも楽しい」ですが、投書が縁で結婚した高齢夫婦の幸せ物語も紹介し「老いても華のある女と男であってほしい」と明るく結びました。

「年をとってなぜ悪い」
―わたしの本音・あなたの本音―

秋田の高齢社会をよくするフォーラム編

（無明舎出版　一二〇〇円＋税）

自分達の老い方を考えていこうと結成した「秋田の高齢社会をよくするフォーラム（代表澤井セイ子秋大教授）」で出された約六〇〇人の生の声を、「一人暮らしになるかもしれないと思ったことがありますか」「老いてゆく時、男性と女性では抱える問題が違うでしょうか」「突然倒れた時のことを考えますか」など、いくつかの設問に対する答の形で掲載した。子供夫婦との同居で上手に距離を置けず、破綻してしまったと言わざるを得ない人間関係も垣間見られ、夫婦どちらが先に亡くなっても、残された者がその後の人生を納得して過ごせるよう日頃から話合っておくことも、死に備えて準備することの一つではないかと思わされた。秋田県は同居高齢者の自殺が多い。まず自分の気持を声に出し、相手の気持も聞き、自分と同じでなくても自分を非難しているのではないと気持を切り替えるのにも、沢山の本音が載っているこの本を使って欲しいと思っている。（丸野内胡桃・記）

事務局だより

島根大会は既述のとおり大盛況でした。地元島根はもとより、全国の皆様のご協力に対して、運営委員一同心から感謝し、お礼を申し上げます。

大会開催に合わせて、昨年の東海三県大会シンポ集『介護が変わる、みんなで変える』が刊行され大変好評です。

ご希望の方は事務局まで。本代、送料共、一冊二千三百円で送らせて頂きます。

さて、介護保険の夜明けを快晴で迎えたいと、各地で活動にまい進してこられた皆様からの怒りは爆発！噴煙のすごさで、当会は先が見えない!!討ち入りです。

☆十二月十一日(土)「大江戸名物・女たちの討ち入りシンポ」於・江戸東京博物館の予定。皆様、討ち入る体力だけは残しておいてください。詳細は次号で。

☆日韓嫁学事始ツアーは、企画の面白さから新聞に紹介され、会員外参加の多い異色ツアーです。ご期待ください。

☆オープンハウスは十一月二十九日(月)午前十一時からです。

（新井倭久子）